

大学生のアタッチメントとソーシャル・サポートの提供, および享受との関連

—— 知覚されたサポートに着目して ——

NGUYEN MINH CHAU*・橋本 創一**・畠垣 智恵***・竹達 健顕**・岡本 茉桜**・日下 虎太郎****

(2023年11月20日受理)

NGUYEN, C., HASHIMOTO, S., HATAGAKI, C., TAKETATSU, T., OKAMOTO, M. and KUSAKA, K.; The Relation of Attachment Style, Provided and Received Social Support in College Student: *Focusing on the Perceived Support*.

ISSN 1349-9580

This study elucidated individual differences in university students' perceptions of providing and receiving social support as a means of stress alleviation in relation to their attachment styles. Attachment style refers to an individual's psychological characteristics in interpersonal relationships and how these characteristics influence the provision and reception of support. A questionnaire survey was conducted with 266 university students, utilizing existing scales for measuring provided and received support and attachment styles. The participants were classified into four groups based on the average of two attachment style subscale scores - "abandonment anxiety" and "intimacy avoidance." A two-factor analysis of variance was conducted with gender and attachment style as the independent variables and the provided support as the dependent variable. The results showed that individuals with a secure attachment style offered more support compared to those with a rejecting style, and those with higher intimacy avoidance provided less support. Similarly, an analysis of variance for received support indicated that individuals with a secure attachment style received more support than those with a fearful style. The subjects of support provision and reception in this study were close friends of the participants. However, the study did not examine these friendships' specific nature or duration. Therefore, future research should consider these qualitative friendship factors because they may influence the nature of support provided and received.

KEY WORDS : Attachment, Perceived Social Support, College Student

* *The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*

** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*

*** *Shizuoka University*

**** *Meiji Gakuin University*

1. はじめに

1. 1 大学生生活における悩み

全国大学生生活共同組合連合会報告調査部 (2021) ¹⁾ に

よると、大学生性の日常生活の中で日頃気にかかっていることが「授業・レポートなど勉学上のこと」が47.2% 占め、就学に関して不安を感じる学生も少なくない。更に、対人関係において悩んでいることは「友達ができな

* 東京学芸大学 教育学研究科

** 東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター

*** 静岡大学

**** 明治学院大学

い(いない)・対人関係がうまくいかないこと」(50.9%)や、「恋愛のこと」(45.4%)であり、学生生活が「充実している」学生も、「充実していない」学生も多く気がかかった大学生活において、学生はいずれ一つの悩みを抱える場合もあり、同時に絡み合っている複数の悩みを背負いこむ場合もあると考えられている。このように長期間において、悩みや不安は学生の心身の健康に悪影響を与え、ストレスにつながると考えられる。その状況への対処法力として、相談機関はもちろん、身近な援助資源を利用するとされている。嶋(1992)²⁾により学生がストレス状況において「家族」「同性友人」「異性友人」というサポート源を利用することが見いだされた。

1. 2 知覚されたソーシャル・サポートとは

このように大学生が直面しうるストレスの緩和効果の一つとして厚生労働省により「社会的関係の中でやりとりされる支援のこと」と定義されるソーシャル・サポート(social support; 以下, SS)という概念の中で、「他者から援助を受ける可能性に対する期待, あるいは, 援助に対する主観的な評価」(岡安・嶋田・坂野, 1993)³⁾と定義されている知覚されたサポートが含まれている。知覚されたサポートは健康とより強く関連することや、ストレスに対する認知的評価段階において、知覚されたサポートは豊かであるほど、ストレス対処の容易さを予測させ、ストレスに対する脅威感を低下させるという知見(橋本, 2005)⁴⁾から、本研究では知覚されたサポートに注目する。

1. 3 サポートの享受およびサポートの提供

上記で述べたようにSSの研究は、受け手の立場からサポートを測定し、受け手本人の心身の健康にどのように影響を与えるかという研究は多い。しかし、サポートを受容ことにより、申し訳なさ、恥ずかしさの負の感情である心理的負債感や、無力感が引き起こされ、自尊心が低下するといった精神的健康に悪影響を及ぼすことが考えられている(Bolger & Amarel, 2007)⁵⁾。また、日々の生活の中で、個人はサポートの受け手であるとの同時にサポートの送り手でもあるという視点からSSを捉える研究が少なくともある。サポートを提供することにより、幸福感の増加(Aknin, Hamlin, & Dunn, 2012)⁶⁾、自尊心の向上(Piferi & Lawler, 2006)⁷⁾、他者との社会的つながりの感覚の増加(Inagaki & Eisenberger, 2012)⁸⁾といった、心理的健康度や社会的満足度に対するポジティブな影響を与えると考えられる。

しかし、サポートの享受やサポートの提供を適切に認識したり、実行したりすることが安易ではないと考えら

れる。サポートの享受と同様に、一方的または、過剰的にサポートを提供することにより、負担感・苛立ちといった欲求不満がもたらせる知見(福岡, 1999⁹⁾;長谷川・下田, 2012¹⁰⁾)から、関係性への不満や対人場面における不適応に連動するという問題が意識される。

1. 4 アタッチメントの概念について

アタッチメントの定義を、「個人が不安や恐怖、ストレスなどという心理的危機を感じたときに重要な他者に対して接近を求めるという反応」という狭義の定義を採用する研究もあれば、「個体のある対象との情緒的結びつき」というような広義な定義を採用する研究もある(遠藤, 2001)¹¹⁾。つまり、前者はアタッチメント対象との情緒的結びつきであり、後者は苦痛や、不安など感情や思考を体験したときに、アタッチメント対象に対して物理的に接近を図ろうとする実際の振る舞いということであり、前者と後者が連動すると考えられる。そこで、本研究ではアタッチメントを、情緒的結びつきが形成されたアタッチメント対象からサポートやケアを求め、経験しようとする傾向、あるいは、サポートやケアの希求に対してアタッチメント対象がどのように応答してくれるかということに関して主観的信念や評価に現れる持続的、かつ包括的な個人の特性のこととして捉える。

1. 5 内的作業モデルとアタッチメントスタイル

Bowlby (1973)¹²⁾は個人が3歳以後にアタッチメント対象との関係に関する信念が形成されると想定している。この信念はアタッチメント対象が誰であるか、および、その対象が必要なときにどのような応答が期待できるかという他者に関する他者観と、アタッチメント対象により自分がどのように受容される、もしくは受容されないかという自己に関する自己観の2つの相補的要素から形成されており、Bowlby (1973)¹²⁾はこれを内的作業モデル(Internal Working Model; 以下IWMで略)と呼んでいる。IWMはアタッチメントに関連した経験についての長期記憶に貯蔵され、アタッチメントに関連する手がかりに反応して活性化され、新しい経験を解釈し、社会的相互作用における他者の行動の予測、自己の行動の計画をもたらす枠組みを形成し、成人期まで持続される性格特性となると考えられている(Rholes & Simpson, 2004)¹³⁾。

アタッチメントスタイルは、IWMの自己観と他者観の2次元で示される(Bartholomew & Horowitz, 1991)¹⁴⁾。この2次元はBrennan, Clark, & Shaver (1998)¹⁵⁾による自己観は見捨てられ不安と命名され、大切な他者から受容されないこと、見捨てられることに対する不安を反映するものであり、他者観は親密性の回避と名付けられ、

他者との親密性、他者への接近、依存を抑制する程度を反映するものである。自己観の低さは見捨てられ不安の高さに、他者観の低さは親密性の回避の高さに該当するとされており、2次元の高低の組み合わせから、安定型、とらわれ型、恐れ型、回避型という4つの分類として捉えられている (Figure 1)。

1. 6 アタッチメントとサポートの提供および享受

Bowlby (1973)¹²⁾ のアタッチメント理論はサポート享受者である乳幼児とサポートの提供者である養育者との相互作用を中心に発展した。年齢が重ねるとともに、個人が友人やパートナーなど様々二者関係を体験し、サポートの受け手もサポートの送り手の立場で振る舞うようになる。そこで、内座化され、維持されていくアタッチメントのIWMは多様な対人関係におけるサポートの提供および享受に関連することが想定される。アタッチメントの見捨てられ不安の特徴から、他者の受容を過剰に要求することによりサポート過度に求める可能性もあれば、好意を保つためにサポートを一方向的に送る可能性も考えられる。その一方、アタッチメントには親密性の回避の次元から、他者との物理的・心理的な距離感を維持してしまうという特徴であり、社会的相互作用の低調がみられたり、サポートの提供、入手が限定される場合があると考えられる。

1. 7 本研究の目的

上記で述べたように、青年期後期、成人期に歩んでいく大学生が直面するストレスを軽減させ、精神的な健康度を維持させるにはSSが重要である。しかし、他

者からのサポートを要請し、享受することが必要な時に、何等かの原因で、自分のニーズを気づかないことや、要請したり入手したり仕方を認知しないこと、他者からの援助を適切に解釈しないことが考えられる。また、他者に対して、過剰にサポートを送ったり、もしくは、他者のニーズを必要な時に応答的に与えられず、対人関係において衝突が起きることに繋がる場合もある。そこで、日々行われているサポートの提供や享受にはこのような個人差があると考えられ、本研究ではアタッチメントをSSに關与するパーソナリティ要因として捉える。

確かにSSとアタッチメントとの関連の先行研究はいくつか存在しているが、主に、恋人や夫婦関係といった親密な関係における関連性について検討されたものがほとんどであり、青年期後期、成人期前期の対象が日々関わっている友人関係においては検討されていない。このような現状を考慮し、本研究では、一般の大学生を対象にアタッチメントがサポートの提供およびサポートの享受とどのように関連するかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2. 1 調査の手続き

2022年5月下旬から6月上旬にかけて、中部地方の大学に在学していた大学生を対象とした。「友人関係におけるサポートについての調査」と題とした質問紙調査を実施した。そこで、282名が調査に協力したが、回答に不備があったものを除き、266名(男性=122名、女性=139名、回答しない=5名)を対象とした。

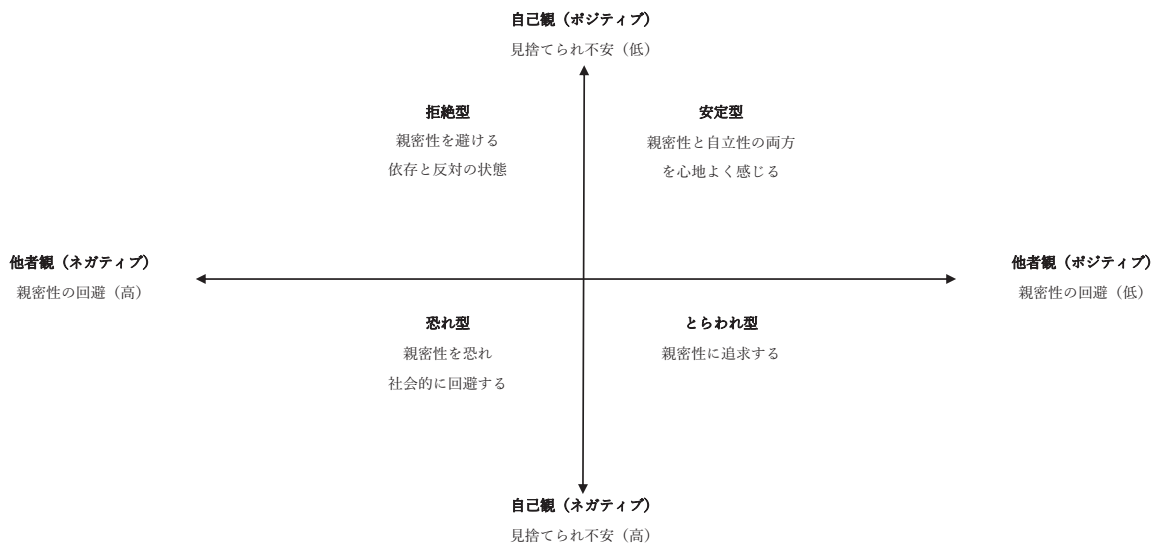


Figure 1 成人アタッチメントスタイルの4分類モデル (Bartholomew & Horowitz, 1981)

Figure 1. 成人アタッチメントスタイルの4分類モデル (Bartholomew & Horowitz, 1981)

2. 2 倫理的配慮

調査は無記名式であり、データは統計的に集計、処理されるため個人情報保護されること、回答しなくても不利益はないことや回答したくない項目をとばしても構わないことを強調して実施した。

2. 3 質問紙の構成

フェイスシート：フェイスシートに、調査対象者の性別、年齢について尋ねた。

ソーシャル・サポートの測定尺度：

①サポートの提供について：福岡・橋本 (1997)¹⁶⁾ のソーシャルサ・ポート測定尺度を、サポート提供を問う項目として適切な表現になるよう各項目の先頭に「相手が」という表現を付け、回答者がサポート提供者の立場を意識しやすいように修正した。サポート源として親しい友人を設定し、それぞれの項目のようなサポートを普段どの程度してあげているかについて計12項目を5件法で測定した。

②サポートの享受について：サポート提供尺度と同様の既存尺度を用いて各項目の先頭に「あなたが」という表現を付け、語尾を「してくれる」という表現に変更し、回答者がサポートの享受者の立場を意識するように修正し、計12項目を5件法で回答を求めた。

③成人のアタッチメントスタイルについて：中尾・加藤 (2004b)¹⁷⁾ の親密な対人関係体験尺度の一般他者版を利用した。不誠実の回答を防ぐための偽質問のDQSの1項目を加えて、31項目を7件法で回答を求めた。

3. 結果

3. 1 各尺度の構成と信頼性の検討

サポートの提供の尺度項目に対して、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、因子負荷量が.35に満たさなかった1項目を除外し、11項目に対して再び因子分析を行った。そこで、「相手が精神的なショックで動揺しているときなぐさめる」のような5項目から構成された因子I、及び、「相手に引越しなど大がかりな用事があるとき、その手伝いをする」のような6項目から構成された因子IIを福岡・橋本 (1997)¹⁶⁾ と同様に前者を「情緒的サポートの提供」に命名し、後者を「道具的サポートの提供」に名付けた。各下位尺度の得点を該当する項目の評定の平均値とした。また、信頼性分析を行い、情緒的サポートの提供のCronbachの $\alpha = .81$ で、道具的サポートの提供は $\alpha = .85$ であった。

一方、サポートの享受の尺度項目手に対しても同様に因子分析を行ったが、全12項目の因子負荷量が.35に満

たしたため、先行研究と同様に全12項目を分析対象とし、「情緒的サポートの享受」および「道具的サポートの提供」という下位尺度から構成すると解釈した。それぞれの下位尺度の信頼性分析の結果は、情緒的サポートの享受のCronbachの $\alpha = .89$ で、道具的サポートの享受は $\alpha = .85$ であった。

成人アタッチメントスタイル尺度についてDQSの回答データを除外し、逆転項目（8項目）を処理し、一般化した最小2乗法・バリマックス回転を行ったところ、因子負荷量が.35に満たなかった2項目を削除し、28項目に対して再び一般化した最小2乗法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果「私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」などの構成される因子Iは中尾・加藤 (2004b)¹⁷⁾ と同じ結果であったため、「見捨てられ不安」という因子名とした。同様に、「私は人と親密になることがとてもこちよい」などの項目で構成された因子IIも同先行研究と同様な結果であったため、「親密性の回避」と名付けた。各下位尺度の信頼性分析の結果について、「見捨てられ不安」の α 係数が.92であり、「親密性の回避」の α 係数が.85であったため、それぞれ十分な信頼性が認められた。

3. 2 アタッチメントスタイルの群分け

Bartholomew & Horowitz (1981)¹⁴⁾ によって提唱されたアタッチメントスタイル4分類の概念を用いて検討を行うため、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」それぞれの平均得点を基準に平均得点以上は高群、平均得点未満を低群に分類し、高低群の組み合わせにより、4群に分類した (Table 1)。更に、アタッチメントスタイルにおける性別の影響を調べるため、 χ^2 検定を行ったところ、有意な差が見られず ($\chi^2 (3) = 7.68, n.s.$)、中尾・加藤 (2004b)¹⁷⁾ の知見と一致した。

Table 1. アタッチメントスタイルのクロス表

	安定	拒絶	とらわれ	恐れ	合計
男	36 13.80%	30 11.50%	32 12.30%	23 8.80%	121 46.50%
女	24 9.20%	34 13.10%	39 15.00%	42 16.20%	139 53.50%
合計	60 23.10%	64 24.60%	71 27.30%	65 25.00%	260 100.00%

3. 3 アタッチメントとサポートの提供および享受との相関について

各要因間の関連性を調べるため、サポートの提供および享受の内容（情緒的および道具的）、見捨てられ不安、

Table 2. 因子間の相関係数

	見捨てられ不安	親密性の回避	情緒的サポートの提供	道具的サポートの享受	情緒的サポートの享受
親密性の回避	0.03				
情緒的サポートの提供	0.09	-.259**			
道具的サポートの享受	-0.07	-.295**	.420**		
情緒的サポートの享受	-0.01	-.282**	.490**	.191**	
道府的サポートの享受	-0.11	-.327**	.273**	.656**	.503**

**<.01, *<.05

親密性の回避との相関係数を算出した。その結果、サポートの提供とサポートの享受との相関はもちろん、見捨てられ不安とサポートの提供および享受の内容との間に、相関が有意ではなかった。それに対して、親密性の回避は提供サポート、享受サポートの内容の全てとの間に弱い負の相関が認められた (Table 2)。このことから、他者との親密性を避ける程度が高いほど他者へサポートをあまり提供せず、他者からサポートを受容しないことがいえる。

加えて、提供サポート、または享受サポートの内容に注目し各サポートの種類を検討したところ、同じサポートの種類との間に中程度の正の相関が見られた。つまり、情緒的サポートの提供と情緒的サポートの享受 (道具的サポートも同様) との間に相関があった。

3. 4 サポートの提供におけるアタッチメントスタイルの比較

アタッチメントスタイルごとの提供サポートの特徴を詳しく調べるため、性別 x アタッチメントスタイル (安定型、とらわれ型、恐れ型、拒絶型) の分散分析を行った。その結果、サポートの提供において、有意な差が認められたのは、アタッチメントスタイルの主効果 ($F(3, 256) = 5.41, p < .05$) であった。そこで、Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ、安定型 ($M=4.04, SE=.07$) と恐れ型 ($M=3.72, SE=.07$)、および安定型と拒絶型の差 ($M=3.75, SE=.07$) が有意であり、安定型のほうは提供サポートが多かった。また、情緒的サポート ($M=4.21, SE=.04$) の提供は道具的サポート ($M=3.56, SE=.04$) よりも有意に多かった。しかし、提供のサポートの内容においてスタイル間の差異が有意に見られなかった。

3. 5 サポートの享受におけるアタッチメントスタイルの比較

サポート享受の場合に有意な差が見られたのはアタッチメントスタイルの主効果 ($F(3, 256) = 7.85, p < .01$)

のみであった。そこで、Bonferroni法を用いた多重比較を行ったところ、安定型 ($M=4.1, SE=.08$) と恐れ型 ($M=3.62, SE=.08$)、および安定型と拒絶型の差 ($M=3.68, SE=.08$) が有意であり、安定型のほうは受容サポートが多かった。また、とらわれ型は恐れ型よりも受容サポートが有意に多かった。情緒的サポート ($M=4.21, SE=.04$) の享受は道具的サポートの享受 ($M=3.45, SE=.05$) よりも有意に多く、アタッチメントスタイルのいずれにおいても同じな傾向が見られた。

しかし、サポート提供とサポート享受の量的な差異 (提供の量が享受の量を引いたずれ) を検討したところ、アタッチメントスタイルに有意な違いが見られなかった。

3. 6 提供および享受サポートに対するアタッチメントスタイルの影響力について

提供サポートに対してアタッチメントスタイルの影響力を検討するために、提供サポートの得点を従属変数、見捨てられ不安および、親密性の回避のアタッチメントスタイルの2要因それぞれの得点を独立変数として強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、決定係数は有意であり ($R^2_{adj} = .10, p < .001$)、親密性の回避 ($\beta = -.33, t(259) = -5.61, p < .001$) が有意な寄与を示した。

同様に、入手サポートの場合において、入手サポートの得点を従属変数、見捨てられ不安および、親密性の回避のアタッチメントスタイルの2要因それぞれの得点を独立変数として強制投入法による重回帰分析を行った。提供サポートと同じく、決定係数は有意であり ($R^2_{adj} = .123, p < .001$)、親密性の回避 ($\beta = -.35, t(259) = -6.04, p < .001$) が有意な寄与を示した。

4. 考察

4. 1 アタッチメントスタイルの分布

本研究では、成人のアタッチメントの因子の「見捨てられ不安」と「親密性の回避」それぞれの尺度得点の平均値と基準として高群・低群に分け、その高低の組み合わせ

わせからアタッチメントスタイルの4群を分類した。そこで、安定型(61名)、とらわれ型(73名)、恐れ型(68名)、拒絶型(64名)それぞれのサンプルはかなり均等に分布された。このような結果に関して、利用した尺度は中尾・加藤(2004b)¹⁷⁾の成人アタッチメントスタイル測定尺度にも拘らず、同先行研究の4群の分布とは異なり、不安定型(拒絶型、とらわれ型、恐れ型)よりも安定型のほうが割合が大きかった。この先行研究では、4スタイルの分類の基準が記載されなかったため、上田・高木(2016)¹⁸⁾の分類の仕方を参考し、これらの先行研究と同様に均等な分布の結果が得られた。各下位尺度の平均値から高群・低群を分けたため両群の割合が等しくなり、組み合わせられた4タイプも均等となると解釈できる。

4. 2 サポートの提供と享受との関連について

提供サポートと入手サポートとの間にかなり強い正の相関が示された結果は、Liang, Krause, & Bennett (2001)¹⁹⁾と一致した。あらゆる対人関係において、他者から受容したものと同等なものを自分が他者に提供するという返報性の規範があり、サポートにおいても、その規範が形成されると考えられる(橋本, 2005)⁴⁾。更に、このような返報性の規範が守られない場合に、相手に申し訳なさなどの心理的負債感や負担感や苛立ちが引き起こされると考えられている(福岡, 1999)⁹⁾。そこで、友人関係において、サポートを多く享受することにより、「将来、相手に手伝うことがあるかもしれない」といった見込みを持ち、相手へサポートを念のため多く与えようとする返報性が促され、また、負債感を軽減させる方略の一つとして考えられる。

更に、本研究の対象者は日本人学生がほとんどであるため、日本人の「評価懸念」(清家・高田, 1997)²⁰⁾に影響される可能性も考えられる。サポートの受容の際には提供よりも、「他者に迷惑をかける」という評価を意識しやすいことから、この認知を避けるために他者からサポートを享受すると考えられる。

4. 3 アタッチメントとサポートとの関連性について

提供サポートの場合では、アタッチメントの下位尺度の中で、親密性の回避との間のみ負の相関が見られ、Simpson et al. (1992)²¹⁾の一部と一致した。このようなことから、他者との間に限定的な親密関係を望む程度、他者に対して必要な時に自分のニーズを応答できない、他者に信用できないと認知する程度が高いほど、友人に対してあまりサポートを提供しないことがいえる。

親密性の回避は他者との親密関係を避けることや、他者に対して自分の要求を適切に、応答的に対応してくれ

ないという認知を反映する(Mikulincer & Shaver, 2012)²²⁾ことから、他者と物理的・心理的に距離を取ったり、独立したりすることが考えられる。距離感を維持する親密性の回避の程度が高い人は友人がどのような状況に置かれているかを把握することや、その状況に応じて友人をどのようなサポートが必要なのか、自分からどのようにサポートすればいいのかを把握し、認知することが困難になるため、サポートの提供をする程度が低いと考えられる。

その一方、見捨てられ不安が提供サポートに相関がみられなかった。見捨てられ不安は自分が他者からサポートやケアを受けることができないかということに対して不安を感じる程度を反映する次元であり、知覚された提供サポートといった他者志向の行動とあまり関連しないことが解釈できる。

享受サポートの場合でも同様に、親密性の回避との間のみ相関がみられた。Simpson et al. (1992)²¹⁾では、親密性の回避が高いほど、相手から情緒的、物理的に距離を置く行動に関連していたことが示された。先述と同様にこの次元は他者からの応答的なサポートを期待しない、信用しない程度を反映するため、相手からの距離を取り、サポートを求めず自分で対応することになるのではないかと考えられる。

4. 4 サポートの提供におけるアタッチメントスタイルの比較について

サポートの提供において、アタッチメントスタイルの主効果のみ有意であり、安定型と恐れ型、および、拒絶型間に有意な差が見られ、安定型は恐れ型と拒絶型よりも多くサポートを提供するとのことが明らかとなった。

Simpson et al. (1992)²¹⁾やMikulincer & Shaver (2012)²²⁾では愛着が安定する者はストレス状況に置かれても、相手にサポートを適切に提供する傾向が示された結果と一致した。安定型は親密性の回避も見捨てられ不安が低く、他者との親密性に抵抗感を持たず、関係を発展させる傾向を示す。積極的に他者と関わり合う安定型は物理的・情緒的な距離を脅迫的に置かず、相手の状況に関する関心を持ちながら相手のニーズを敏感的・応答的に対応したりすると考えられる。更に、他者が自分をサポートしてくれない、見捨てられてしまうことを心配する程度が低い場合、このような認知に引き起こらせる苦痛に影響を少なく受けず、他者に対して利他的なサポートを提供する傾向を示すと考えられる。

それに対して、見捨てられ不安も親密性の回避も高い恐れ型は、必要な時に他者が自分をサポートやケアをしてくれないということを心配すると同時に、その心配を避

けたり軽減したりする戦略として、他者から離れてしまうと考えられる。サポートをもらえない存在であるという自己観は恐れ型の個人に自尊感情に負の影響を与え（中尾・加藤, 2004b）¹⁷⁾、他者と関わるほどネガティブな情緒を活性化し、個人内の苦痛やその苦痛に関する思考の反芻を引き起こすと考えられる（Mikulincer & Shaver, 2004）²³⁾。また、このような苦痛を防衛するのみならず、他者が助けてくれないという認知は他者が信用できないという評価につながるため、恐れ型は他者との親密性を回避し、関係を積極的に発展させないと考えられる。

一方、拒絶型の個人が他者に物理的・心理的に距離を保ち他者の状況に対応するサポートを与えないことに加えて、困っている他者のネガティブ感情に対して防衛するためにサポートが必要としている他者であると認知してもサポートを送らないこととなることも考えられるのであろう。そのため、提供サポートにおいて拒絶型が安定型よりも提供のサポートが少ないと考えられる。

分散分析の結果から、提供サポートの内容の特徴も明らかになった。アタッチメントスタイルにおいて道具的サポートよりも情緒的サポートのほうが量的に多いという結果が得られ、福岡・橋本（1997）¹⁶⁾の知見と一致した。本研究の対象者は大学生であるため、財務的資源に関わる道具的サポートが大学生にとって提供しづらいものであると考えられる。更に、サポートの提供先は親しい友人とのことから、対象者と近い世代の人物を想定することが多く、対象者自身の学習、経験に基づき、この人物のサポートニーズとすり合わせながら提供可能なサポートを意識するため、進路といった重要な課題へのアドバイスを提供することを控え、道具的サポートの提供よりも相手を慰めるような情緒的サポートを選好すると解釈できる。

4. 5 サポートの享受におけるアタッチメントスタイルの比較について

サポートの享受の場合も、サポートの提供と同様に愛着の主効果のみ有意で、その結果、安定型と恐れ型、および、拒絶型の間に有意な差が見られ、安定型のほうは多くサポートを享受するとのことが明らかとなった。

この結果については親密性の回避も見捨てられ不安も低い安定型が他者との関係において、提供サポートも入手サポートを適度に行う傾向が示されたSimpson et al. (1992)²¹⁾と一致した。アタッチメントが安定する者は必要な時に他者が助けてくれるという認知を保ち他者に対して信頼感を持つことから、自分の状況に関して開示することに抵抗を表さずサポートを適度に求めることが考えられる。その一方、恐れ型の個人は、他者に見捨

てられることやサポートを受けられないことに不安を感じると同時に、その不安を防衛するために、他者を信頼せず、他者関係を回避してしまう傾向があることから、他者をサポート源としてあまり認知しないかもしれない。従って、個人の困難や、悩みを意識しているとして、他者に開示せずサポートを希求したり受容したりしないと考えられ、安定型よりサポートを少なくサポートを入手することが予想される。

また、拒絶型は恐れ型と同様に親密性の回避が高く、親密な二者関係を回避しようとする傾向が考えられる。これらのアタッチメントスタイルの個人は「他者が援助的で良いもの」といった他者観をネガティブに評価し、他者が自分をサポートすることができないと認知してしまい、他者に対する不信が考えられる。

とらわれ型のサポートの享受に関する知見が見当たらなかった。しかし、このタイプの個人は親密性の回避が低いが見捨てられ不安が高いことから、他者がサポートしてくれないことや他者に見捨てられることに対して不安になりやすく、この不安を解消するために相手に脅迫的に関わったり、距離を維持したりすることが考えられる。また、他者が応答的なサポートを受けられない心配が高まるとともに、ネガティブ感情が活性化され、個人内に自己の苦痛として関心を向いてしまう。そこで他者からのサポート的な意図や行動に対して他者からのサポート的でない意図、行動に過剰に反応したりする。その結果、他者からのサポートを適切に認知せず、受容することがそう害されると考えられる。

4. 6 提供および享受サポートに対するアタッチメントスタイルの影響力について

提供サポートおよび享受サポートに対するアタッチメントスタイルの影響力を検討するため、重回帰分析を行った。提供サポートも入手サポートにおいて、親密性の回避のみ有意な寄与を示した。このことから、他者に関して援助的であり、信頼できると認知し、他者関係の親密性を望む程度がサポートを提供したり受容したりしようとするという認知につながっていることを示唆された。このことは、困っているときに、他者を信頼し、接近しながら援助を求めようとすることを抑制せず、他者関係において物理的・心理的に距離を保たないことにより、他者との間に、良好なコミュニケーションや自己開示度が高くなり（Raikes & Thompson, 2006）²⁴⁾、共有される自分が直面している困難や置かれている状況に応じる他者から受けるサポートを相互的、適切に評価できると予想される。それにとどまらず、二者関係の親密性を回避しようとする程度は、相手への関心や、自己から関

与しようとする認知程度を通じて、相手が置かれている状況に対する敏感さ、その状況に応じる可能な応答的なサポートを評価し、サポートを送ろうとする認知にもたらすことも考えられる。

文献

- 1) 全国大学生協連 (2021). 第57回学生生活実態調査全国大学生協連.
Retrieved from: <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2023/10/28)
- 2) 嶋信宏. 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果, *社会心理学研究*, 7, pp.45-53, 1992.
- 3) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二: 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果, *教育心理学研究*, 41, pp.302-312, 1993.
- 4) 橋本 剛: 『ストレスと対人関係』ナカニシヤ出版, 2005.
- 5) Bolger, N., & Amarel, D.: Effects of social support visibility on adjustment to stress: Experimental evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, pp.458-475, 2007.
- 6) Aknin, L. B., Hamlin, J. K., & Dunn, E. W.: Giving leads to happiness in young children. *PLoS ONE*, 7, Article e39211, 2012.
Retrieved from: <https://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0039211> (2023/11/1)
- 7) Lawler-Row, K. A., & Piferi, R. L.: The forgiving personality: Describing a life well lived?. *Personality and Individual Differences*, 41, pp.1009-1020, 2006.
- 8) Inagaki, T. K., & Eisenberger, N. I.: Neural correlates of giving support to a loved one. *Psychosomatic Medicine*, 74, pp.3-7, 2012.
- 9) 福岡欣治. 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手—提供の互惠性と感情状態—知覚されたサポートと実際のサポート授受の観点から. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13, pp.57-70, 1999.
- 10) 長谷川真穂・下田芳幸: 中学生における友人間のソーシャルサポートの互惠性と共感性およびストレス反応との関連について. 富山大学人間発達科学部紀要, 6, pp.211-220, 2012.
- 11) 遠藤 利彦: 「理論」事典. 中島義明編著『関係性とパーソナリティの発達の理論』.現代心理学. 朝倉書店, pp.488-524, 2001.
- 12) Bowlby, J.: Attachment and loss: Vol. 2.: Separation . Hogan, London. 黒田 実郎・岡田 洋子・吉田 恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版, 1973.
- 13) Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (Eds.): Adult attachment: Theory, research, and clinical implications. Guilford Publications, 2004
(ロールズ, W. S., & シンプソン, J. A. (編) 遠藤利彦・谷口弘一・金政脩司・串崎真志 (監訳). 『成人のアタッチメント: 理論・研究・臨床』北大路書房, 2008).
- 14) Bartholomew, K., & Horowitz, L. M.: Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61(2), pp.226-244, 1991.
- 15) Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R.: Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.). Attachment theory and close relationships. New York: Guilford Press, 1998.
- 16) 福岡欣治・橋本幸: 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果, *心理学研究*, 68, 403-409, 1997.
- 17) 中尾達馬・加藤和生: 「一般他者」を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討, 九州大学心理学研究, 5, pp.19-27, 2004.
- 18) 上田鼓・高木秀明: 青年期のアタッチメントと共感性及び自我状態との関連, *教育デザイン研究*, 7, pp.15-22, 2016.
- 19) Liang, J., Krause, N. M., & Bennett, J. M.: Social exchange and well-being: Is giving better than receiving?. *Psychology and Aging*, 16, pp.511-523, 2001.
- 20) 清家美紀・高田利武: 文化的自己観と自己査定行動: 日本文化における検討, *社会心理学研究*, 13, pp.23-32, 1997.
- 21) Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S.: Support-seeking and supportgiving within couple members in an anxiety-provoking situation: The role of attachment style. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, pp.434-446, 1992.
- 22) Mikulincer, M., & Shaver, P. R.: Attachment theory expanded: A behavioral systems approach. In K. Deaux & M. Snyder (Eds.), *The Oxford handbook of personality and social psychology*, Oxford University Press, pp.467-492, 2012.
- 23) Shaver, P. R., & Mikulincer, M.: What do self-report attachment measures assess? In Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (Eds). Adult attachment: Theory,

research, and clinical implications. New York: Guilford Publications, 2004.

- 24) Raikes, H. A., & Thompson, R. A.: Family emotional climate, attachment security and young children's emotion knowledge in a high risk sample. *British Journal of Developmental Psychology*, 24, pp.89-104, 2006.